

令和5年度 総合型選抜 経済学部 小論文
出題の意図と解答の傾向

【出題の意図】

少子高齢化の進行が著しい日本における社会の持続可能性について考察する、広井良典（2019）『人口減少社会のデザイン』の一部を抜粋して出題した。設問では、特にコミュニティやつながりに着目されている部分を取り上げている。

<設問1>

「日本社会とコミュニティ」について述べられている箇所から以下3点を抽出することが求められる。

- ① 稲作を中心とした社会構造の中で培われた関係性であること
- ② 「農村型コミュニティ」に傾斜しがちであること
- ③ その結果、現れている性向や事象。第7段落の高度成長期の特徴について触れていること

【解答の傾向】

「農村型コミュニティ」に傾斜しがちであること、その結果として現れている日本人や日本社会の性向や事象については多くの答案で述べられていた。一方で、なぜ日本社会あるいは日本人の関係性が「農村型コミュニティ」に傾斜しがちであるかについての背景まで記述できている答案は非常に少なく、多くの答案が減点対象となった。現象や結果に着目するだけでなく、なぜそのような現象が起きているのかまで深く読み取ることが求められる。

<設問2>

アンケート調査の結果が記述されている「居場所とまちづくり」の第2段落を参照し、女性と男性の回答結果の違いを示していることが基本的に求められる。加えて、その理由として、第4段落の記述「戦後の高度成長期を中心に、農村から都市に移った日本人にとっては、他でもなく「カインシャ」と「核家族」が居場所の中心であり、男性にとってもとりわけカインシャの存在が大きかった」を参照し記述していることが求められる。

【解答の傾向】

アンケート調査の結果については多くの答案で字数制限を意識して要約されていた。男性と女性の居場所の「違い」に着目した要約になっているかがポイントであり、要約で取り上げる観点によっては間違った解釈に至る答案もみられた。また、男女の違いの理由については、異なる段落で述べられていることから、全く記述がない答案もみられた。アンケート結果の要点を正しく捉えて要約できていることと、その理由まで記述し字数以内でまとめることが求められる。

<設問3>

第6・7段落に記述してあるアメリカ、日本、ヨーロッパの都市のありようの違いを参考に記述することが求められる。駅前に若者が学校から帰った後も安心して過ごせる場所を設ける、高齢者が診察を待っている間に過ごせる場所を設ける、などが考えられる。

【解答の傾向】

採点者は下記の4つの観点に沿って採点した。

- ① 現状の日本の地域の課題もしくは問題点を記述している。
アメリカやヨーロッパの違いにも触れ、正しく日本の地域の課題や問題点を記述できている答案が多くみられた。
- ② 「若者」もしくは「高齢者」のいずれかを対象者として設定していること。
設問文で「若者もしくは高齢者」と記述していることからどちらかをターゲットにした取り組みが記述されることを想定したが、双方について述べている答案もみられた。その場合、字数制限があることから下記③④の点で説明が不足する。少子高齢化社会を意識し、これから人数が増える高齢者をターゲットに選ぶ答案の方が多傾向があった。
- ③ 地域における居場所と福祉の両面に触れて取り組みを記述していること。
福祉についても触れる必要があることから、高齢者をターゲットにした取り組みの方が考えやすかったことが推測できる。高齢者が人と話せる場所や運動できる場所をつくることを提案する答案が多くみられた。多世代の交流を促す方向性と、同世代の交流を強化する方向性の両方を取っている点が印象的だった。実際に自分の祖父母など身近な高齢者の現状について述べた上で取り組みを提案する答案もみられたが、自分たちが高齢者ではないことから高齢者が何を求めているか、どのような課題を抱えているか、十分に考察できていない答案もみられた。
- ④ 利用者にとって有用で且つ新しい視点で、地域で取り組めることを具体的に示していること。
有用性については、上記にも記載した通り、本当に高齢者にとってその居場所が有用なのか十分に考察できていない答案もみられた。新しい視点での取り組みと判断できる答案は少なく、若者ならではの視点に立ち高齢者の多世代交流を促すなど、独自性のある視点を意識した答案を評価した。取り組みが抽象的で具体的に描けていない答案も多くみられた。実際に自治体で行われている取り組みを参考にしている場合は具体性が高まりやすい。また、居場所づくりをすべてボランティアで行うなど、取り組みの持続可能性の観点から地域で具体的に取り組めるか実現性に懸念がある答案が多くみられた。